

沖縄教区報・道しるべ

発行所：日本基督教団沖縄教区 〒901-2213 宜野湾市志真志 4-24-7 電話(098)898-4363/FAX(098)897-6963(教区事務所)
発行人代表：平良 修 編集：沖縄教区報・道しるべ編集委員会 E-mail okikyoku@yahoo.co.jp

地には平和を

金井 創 佐敷教会牧師

11月30日(土)、辺野古の海でクリスマス讃美歌を歌う催しがなされました。これは12月8日の県民クリスマスのプレ企画として行われたもので、教派を超えてひとつになって賛美しようという初の試みです。日頃、海上抗議活動をしている船長たちの協力を得て船が3隻用意されました。

こうして準備した企画でしたが、30日は海には強風波浪注意報が出ていました。30人近く集まった人たちはまず辺野古の港で「平和の祈り」をささげ、そこで讃美歌を1曲歌ったあと、希望者だけ船に乗って出港しました。乗ったのは半分ぐらいでしょうか。それでも工事現場に近づいて船を並べ、クリスマスの讃美歌「もろびとこぞりて」を歌いました。波風に負けないほど力強く賛美した歌声は風に乗って港まで

聞こえていたそうです。

30日も現場では護岸工事、埋め立て土砂投入が続いていました。その前で歌うことに何か意味があるのかと思われるかもしれませんが、讃美歌はアピールであるよりも祈りです。祈りも賛美も教会の中だけでささげられるものではありません。問題の起こっているその現場で祈り、歌う。そこにこそ主が働いて下さいとの願いの現れです。

イエス・キリストの誕生を覚えるクリスマスを迎えるに当たって、平和の主がここにも来てくださいという願いであり祈りです。クリスマスの夜、天使たちが歌った「地には平和、御心にかなう人にあれ」の賛美に心をつなげイエス・キリストのご降誕を迎えましょう。

ウィリアム・エルダー宣教師&平良 修牧師 「証言会～米軍占領下の沖縄の教会～」

2019年11月21日 沖縄キリスト教学院 シャローム会館



米軍統治下の沖縄に日本基督教団から「対話の道を開いて欲しい」と、沖縄キリスト教団に宣教師として派遣（1966～1969）されていたウィリアム・エルダー（92）宣教師が大阪府より来県した。1966年11月のフェルディナンド・T・アンガー陸軍中将の第五代高等弁務官就任式での祈りで平良修牧師は、「神よ、願わくば、世界に一日も早く平和が築き上げられ、新高等弁務官が最後の高等弁務官となり、沖縄が本来の正常な状態に回復されますように、せつに祈ります。」「天地のすべての権威を持ちたもう神の子イエス・キリストは、その権威を、人々の足を洗う僕の形においてしか用いられませんでした。沖縄の最高権力者、高等弁務官にもそのような権威のあり方をお示してください。」と祈った。その祈りの相談を受け支持したのがウィリアム・エルダー宣教師であった。今回、平良修牧師と、50年ぶりの再会を果たした。ふたりは辺野古新基地建設をはじめ、沖縄の置かれている状況はあの頃となんら変わらず、むしろ悪くなっていると語った。

「証言会～米軍占領下の沖縄の教会」（司会：西浦昭英・日本キリスト教会沖縄伝道所会員）は11月21日（木）、午後7時～9時、沖縄キリスト教学院シャローム会館（1-101）において（参加160名）開催された。主催は日本基督教団沖縄教区、協力は沖縄キリスト教学院大学平和総合研究所。証言会は①開会の挨拶（石川栄喜沖縄教区総会副議長。右写真）、②映像「あるアメリカ宣教師の軌跡～ウィリアム・エルダーさんと沖縄」、③対談「ウィリアム・エルダー宣教師&平良修牧師」、④質問に答えて、⑤閉会の挨拶で構成された。



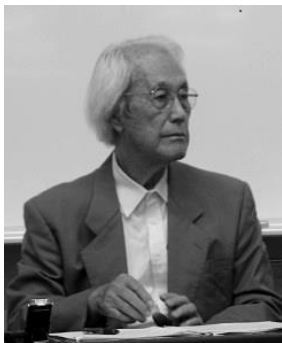
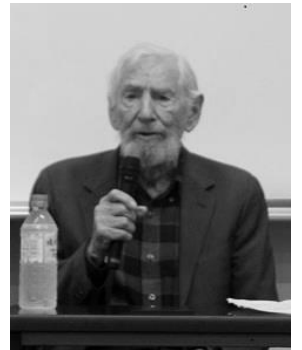
上映された映像「あるアメリカ人宣教師の軌跡③～ウィリアム・エルダーさんと沖縄」は下記のURLより再現できる。(構成・ナレーション：山中速人、制作：関西学院大学山中速人研究室)

<https://www.youtube.com/watch?v=1sej5154TPI&list=PLu5CH1Ko-10jKcpv12rVsbX5aFnFmKghb&index=3>

映像で、与那原教会に赴任したエルダー宣教師は、米軍基地、他の宣教師に対して距離をとった。基地立ち入りのパスの発給を受けず(PX、米軍の病院等も利用せず)、沖縄の一般市民の暮らしに徹した。十二指腸潰瘍の手術も那覇病院で受け、一か月間入院生活を送った。当時のベトナム戦争を振り返り、北爆したB52の搭乗員の話として、「朝起きて、朝ご飯食べて、家族にバイバイして、爆弾おとして、帰ってきて、晩御飯食べて、風呂に入る。戦争やっている気がしない。」と機械的にルーチン化した北爆と、それでも苦しむ搭乗員の心の奥に触れている。アメリカという国は独立戦争で獲得した国であり、ベトナムの人達も独立のために戦っていると理解を示している。ペンタゴン指示の「統合労働布令」(CLO: Comprehensive Labor Ordinance) 発布への抗議についても語っている。

対談で、ウィリアム・エルダー宣教師と平良修牧師は当時を振り返りつつ、現状についてますます悪化する沖縄の現状を指摘した。

[ウィリアム・エルダー宣教師] 1926年生まれ。1948年12月に来日、日本基督教団の宣教師として、長崎、鳥取で働く。1966年6月～1969年6月、沖縄キリスト教団に派遣され、与那原教会牧師として働かれた。平良修牧師の祈祷の際、相談を受ける。その後、東京などで宣教され、1983年4月から大阪女学院短大の教授になり、学長を務められた。現在、大阪女学院大学名誉教授、池田五月山教会員。



[平良修牧師] 1931年、沖縄・宮古島生まれ。1952年琉球大学英文科3年中退、東京神学大学に留学。1959年、上地教会牧師に就任。1964年国際基督教大学に留学。1965年ジョージ・ピーボディ教育大学(米国)に留学。信仰と生活の一大転機を体験。1966年沖縄キリスト教短期大学学長に就任。アンガー高等弁務官の就任式での祈祷をささげた。現在、日本基督教団沖縄教区総会議長、うふざと伝道所牧師。



2019年・永眠者記念礼拝

2019年11月9日 沖縄教区霊園

2019年・永眠者記念礼拝が石川栄喜牧師（沖縄教区 霊園管理運営委員長）により、沖縄教区霊園において執り行われた。

「教区霊園管理運営委員会」は、沖縄教区霊園の管理及び運営に関する責任を教区が負い、その勤めを果たすため設置された。霊園利用者と今後のことを話し合いながら整えていくことを目指している。霊園管理運営委



員会が設置されてはじめての永眠者記念礼拝となった。また、「霊園関係者の会」は存続される。

[霊園管理運営委員会の委員構成] 委員長：石川栄喜、委員：宮里稔（利用者）、又吉京子（沖縄キリスト教センター館長）、沖縄キリスト教センター職員（会計）。礼拝後各種報告がなされた。

[霊園利用状況] 2018年4月1日～2019年3月31日

契約件数（104件）、教区使用（4件）、空きBOX（20件）。合計128件。



「沖縄教区教会婦人会連合」関連の報告

報告者：普天間ともえ（委員長）

◇沖縄教区教会婦人会連合（普天間ともえ委員長）は2018年4月7日の総会で、当分の間の運動休止を決定した。当分の間活動プログラムを休止し、組織に縛られない自由な婦人交流に力をいれ、その交流の中から新しい可能性と組織の活力を醸成したいというのである。以下は、普天間ともえ委員長にホーム小委員会中心に見えていた課題等を報告して貰った。

◇◇◇◇◇

1、ホーム小委員会について

①ホーム小委員会の発足

1990年当時教区教会婦人会連合では老人問題、老人ホームの建設などについて度々話し合われていた。相愛アパートの土地売却により教区から頂いた、800万円の資金があった。

全国教会婦人会連合が運営する「にじのいえ」（隠退女性牧師のための施設）の先例があった。

与那原宣教師館跡地利用を検討したが、話が進まなかった。

1991年老人ホームのための準備委員会として「ホーム小委員会」を作り、1992年より「信仰者共同住宅」のための資金作りを開始した。

②ホーム小委員会の課題

1993年、新嘉喜ナへさんから「主の御業のために用いて欲しい」との御意志により、南城市佐敷在の農地、宅地、建物の遺贈があった。

・教区教会婦人会連合は法人格がなかったので、相続する事は出来ず、取り敢えず佐敷教会に遺贈した。

・付言事項により「その物件を教区婦人会連合に使用させてくれるよう、また、将来教区教会婦人会連合が法人格を取得した時は、教区婦人会連合に所有権を移してくれるように」と記されている。

農地に関しては農地改良されていたために、農地以外への転用はできない。

教会が農地を所有することは原則として出来ないため、佐敷教会が登記出来ない。

等々の理由でこれまで全く用いられていなかった。

2、土地の所在地と面積

①農地 南城市佐敷字仲伊保花振原281-1 970㎡

②宅地 南城市佐敷字仲伊保花振原231-3 422㎡

▷次号の『沖縄教区報・道しるべ』の発行は次の通りです。◁

◇第279号 年頭修養会号(2020年2月)

※上記発行に合わせて情報提供、記事提供をよろしく願います。

●● 投稿案内 (皆さんの投稿、話題、川柳などの作品等を募集しております)

『沖縄教区報・道しるべ』編集委員会では、教区の皆様の身近なニュースや話題、意見、提言等を広く求めています。明日の教区のため投稿をお待ちしております。

【要項】600字内で、沖縄教区事務所へ『道しるべ投稿』と明記の上、メール、ファックスまたは郵送して下さい。随時受け付けております。なお、画像はモノクロ処理となります。

沖縄教区事務所：〒901-2213 沖縄県宜野湾市志真志4-24-7 FAX 098-897-6963

E-mail okikyoku@yahoo.co.jp

第11回 中伝協 伝道集会

2019年11月23日(土)午後2時～ 日本キリスト教団高原教会

日本キリスト教団・沖縄教区・中部伝道協議会(石川教会、上地教会、宜野湾伝道所、コザ教会、志真志伝道所、平良川伝道所、高原教会、美里教会、与勝教会、読谷教会)の第11回中伝協伝道集会が11月23日(土)、午後2時より高原教会において68名が集う中、開催された。

中伝協が活動を再開して9年目となる。今回で11回目の集会の開催となった。信徒主導の伝道活動の数多くの課題を抱えながら、沖縄の教会が直面している共通の課題への提起も行っている。伝道集会の案内パンフで指摘しているのは、①「一つの教会で一人の牧師を招聘するには財政的に無理があること」、②その背景に、「教勢の著しい低下と現住陪餐会員の高齢化が進み、教会活動が停滞している」とし、このままでは「私達の時代に沖縄の教会は確実に消滅していくという危機感から」中伝協の活動再開が始まったとしている。存続の危機に直面している沖縄の教会という認識に立って、「みずからの存立の意味と教会の使命に関わる問題として担えるよう理解を深め、共に問題解決に向かう歩み」を訴えている。



いが人生を変えるということがある」として、ありのままの私のままのイエス・キリストとの出会いのすばらしさについて説教した。

集会は「南部信徒会」(代表・大森節子、書記・仲井真由美子、会計・又吉京子)の大森節子代表より結成経過報告がなされた。第Ⅱ部では、証し『試練を乗り越えて』仲宗根勇光(美里教会信徒)、証し『新生の恵み』仲地弘隆(与勝教会信徒)と続き、盛会のうちに閉会した。



第Ⅰ部礼拝では、仲松あかり(ソプラノ)「ていんさぐぬ花」「キリストにはかえられません」(ピアノ伴奏:長濱 彩)の独唱が披露された。続いて沖縄教区総会議長の平良修牧師は説教「イエス・キリストとの出会いのすばらしさ」で、椎名麟三の「出会い」から引用しつつ、「イエス・キリストからの光」に言及した。「人と人との出会

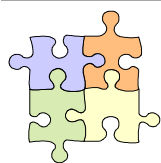


写真左上：平良 修牧師
 写真右上：仲松あかり(普天間バプテスト教会)、長濱 彩(シャローム教会)
 写真左：大森節子南部信徒会代表



写真左上：証し「試練を乗り越えて」仲宗根勇光（美里教会信徒）

写真左下：証し「新生の恵み」仲地弘隆（与勝教会信徒）



「2019年度〔第37回〕年頭修養会のご案内」

- 日 程：2020年1月12日(日)午後5時～13日(月)午後3時（オプションは14日（火））
- テーマ：宮古島の宣教のあゆみ
- 会 場：宮古島伝道所（宮古島市平良字下里1046-1）
- 参加費：2,000円（※開会礼拝にて献金があります。オプション参加者は別途1,000円）
- 交通費、宿泊費：各自負担

年始恒例の沖縄教区年頭修養会は宮古島での開催となります。宮古島伝道所は7月に新会堂が献堂されました。新しい会堂には牧師館と「八重山・宮古宣教センター」も併設され、今後、さらに八重山・宮古地区の宣教の広がり期待されます。今回の修養会は「宮古島の宣教のあゆみ」というテーマで、宮古島伝道所の74年間の歩み、さらには南西諸島（琉球弧）の陸上自衛隊ミサイル基地建設に反対し、「平和を創り出す教会」としての今後のビジョンを伺います。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。詳細は各教会に送付されている「年頭修養会」ご案内をご覧ください。

「平和、それは「琉球弧」から～「琉球弧自衛隊基地問題キリスト者ネットワーク」の構築をめざして

日時：2020年1月27日（月）19時～21時

場所：志真志伝道所（沖縄キリスト教センター／098-898-4361）

講師：安次富 浩さん（ヘリ基地反対協議会・共同代表）

主催：沖縄教区八重山・宮古宣教委員会/九州教区奄美地区委員会

問い合わせ：八重山宮古宣教センター 0980（72）2774

奄美地区委員会 0997（53）4335

宮古島の教会を訪ねる旅

2019年11月30日～12月1日

「宮古島の教会を訪ねる旅」は「沖縄キリスト教センターぎのわんセミナーハウス」と「沖縄教区交流委員会」の協力の下企画された。2019年11月30日（土）～12月1日（日）の1泊2日の日程で、7人が参加した。一日目は下地恵子さんの案内で、自衛隊基地建設の現状、アリランの碑、南静園をまわり、八重山宮古宣教センター（宮古島教会）で、下地恵子さんに「宮古島の歴史と現状」を報告して貰った。夕食を交えながら地元の文学、郷土史研究に携わっている4名を交えての交流会となった。

二日目は、機関誌「んみゃーち ちゃーち」で繋がっている教会（宮古島教会、カトリック宮古島平良教会、宮古バプテスト教会）の礼拝に参加した。また、宮古聖ヤコブ教会、宮古ベテル教会、宗教法人白い家フェローシップを訪問し交流を深めた。それから自衛隊が触手を伸ばす、下地島パイロット訓練飛行場（新ターミナルビルが開業し、定期便が就航）をまわり、「通り池」の琉球石灰岩のカルスト地形の景観を見学した。



（写真上左）航空自衛隊宮古島分屯基地。1973年米軍より引き継いだレーダー基地。日本の企業が開発した、機密の詰まった世界有数の制空能力を誇るレーダー基地。

（写真上右）陸上自衛隊駐屯地建設が進む上野野原の「千代田カントリークラブ」跡地。配備される地対空・地対艦ミサイル部隊と合わせて800人規模となる。



（写真左下）陸上自衛隊ミサイル基地の「弾薬庫」建設が進む城辺保良鉦山跡。

宮古島は観光需要に湧く一面、東京並の家賃の高騰等不動産バブルにもまれている。観光の陰に隠れて自衛隊の配備が進行していく。その現状の凄まじさを下地恵子さんは「宮古島の歴史と現状」と題して報告した。

交流会では、何故たやすく自衛隊を受け入れたかが話題となった。米軍による強制土地接収ではなく、個人用地の国による買い取りで土地が確保されたこと等々、沖縄島での米軍との土地闘争のような歴史との違いが指摘された。

宮古島の戦争の爪跡も深い。「宮古南静園」の隔離の歴史を知る為、ハンセン病歴史資料館を訪れた。その戦火が厳しくなる中、患者は放棄され、園長は日本陸軍司令部に逃げ込んだ歴史の中に、教区の歴史を彷彿させるものもあった。

また、宮古島には16か所の慰安所があったことが関係者の調査で明らかになっている。碑は野原地区の慰安所の近くに建てられていて、目撃していた個人の提供した土地に建立されている。

短い中身の濃い訪ねる旅となった。(文責：仲本 瑩)



(写真) 宮古島教会主日礼拝 (説教: 坂口聖子)



(写真) アリランの碑

沖縄キリスト教団精算人変更及び主たる事務所の住所変更について

(公 告)

宗教法人・沖縄キリスト教団の清算人変更及び事務所移転に関する登記が2019年10月11日に完了しましたので、下記事項について公告します。

記

- 1 清算人の変更
 - (1) 清算人を竹花和成から平良修に変更する。
 - (2) 当法人規則第14条により、新清算人の任期は2019年9月15日より2021年9月14日までの2年とする。
- 2 主たる事務所の住所変更

(旧) 沖縄県那覇市久米四丁目7番地3
 (新) 沖縄県宜野湾市志真志四丁目24番7号

2019年11月30日

宜野湾市志真志四丁目24番7号
 沖縄キリスト教団
 清算人 平良 修

地の塩「三本の木」

ある丘に、小さな木が三本立っていた。一本目の木は「大きくなったら王様の宝箱になりたい」との夢を描いていた。二本目の木は「大きくなったら王様を乗せる立派な船になって世界へ行きたい」との夢を持ち、三本目の木は、「静かにここで動物たちを集め、みんなに見上げられて、おだやかに平和に暮らしたい」と願っていた。

ある時、木こりがやってきて、大きく育った三本の木を切り倒して持って行った。

一本目の木は動物の餌箱「かいば桶」になった。二本目の木は漁師を乗せる小舟になった。

三本目の木は材木にされ、放置された。

ある日の晩、若い夫婦が「かいば桶」のある馬小屋にやってきた。そして赤ちゃんが生まれ、その子を「かいば桶」に寝かせた。そしてその子の誕生を祝って、羊飼いや、遠くの国からの訪問者などが集まり、「神の子イエス様だ」と言って喜んだ。

小舟になった二本目の木は、漁師たちを乗せていると、突然の嵐。小舟は転覆しそうになり、みな恐怖の中に置かれたが、小舟の中の一人の男が「静まれ」と言うと、風も波もすぐに静まった。漁師たちはみな、「この人は神の子だ」と言って驚いた。

三本目の木は、ある時、倉庫から引き出され、丘の上に運ばれ、十字架になった。

その十字架につけられ、処刑された男を見て、そばにいた兵隊は、その木を見上げて「この人は神の子だ」と言った。

「三本の木」は、それぞれ自分の思い通りの夢はかなわなかったが、自分の夢以上のものにされて神さまに用いられ、主イエスのために意味ある働きをする「木」として喜びに包まれた。

我らも、神の御計画に沿って歩む時、自分では思いもよらぬ幸いの中に用いられる。

クリスマスを祝うこの時、「神の御計画に沿う」とは何か。それは、自分のために救い主が御産まれになったことを心から喜ぶこと。主イエスは「あなたのため」にも産まれてくださったからである。

文責 芳澤 信

編集後記

「おねむよ、おねむ。幼き王よ。天使が見守り、星々がかがやく下で。

やがて、憂いの朝がやってくる。苦い悲しみと流れる涙の。

やがて、両手に釘が打ちこまれ、からだは割かれ、墓に横たわる。

おねむよ、おねむ。幼き王よ。輝く復活の朝を夢見て。死に勝利して、死から解き放つ朝を。」

“Sing lullaby!” by Sabine Baring-Gould (1834-1924)

今年も、クリスマスを迎えようとしています。新しい天皇が即位した中で、災害に苦しむ人々、相変わらず続くいじめや引きこもり、過酷で低収入の労働を強いられている人々……。

そうした混乱する社会・世界の中で迎えるクリスマスに、私たちは何を祈るのでしょうか？

「道しるべ」は、今年から大幅に紙面を増やし、写真を多くして、読みやすく親しみやすい教区報を目指しています。それは記事についても同じで、イベントや会議の報告ばかりではなく、読者からの意見や報告なども載せていき、皆で作り上げていく「道しるべ」にしたいと考えています。皆様からの投稿をお待ちしています。

新しい年も、それぞれの地域にある教会が、地域の人々に神の栄光と平和のメッセージをお伝えしていくことができるように祈りたいと思います。

中村 和雄 (道しるべ編集委員)